Cutting-Edge［カティング・エッジ］
ジェンダー問題解決のカギを提示する最前線書誌情報誌
2019.10. 第67号
ムーブ発

ジェンダー・エッセイ

ピンチはチャンス

白井（しらい） 文（あや）
一般財団法人
大阪府男女共同参画推進財団
業務執行理事

2002年12月に行われた兵庫県尼崎市長選挙に出馬要請を受けた私は、離婚調停中でした。3期目を狙う現職候補者と私の一騎打ちになる想定で、離婚調停中の選挙戦はあり得ないと、私は固辞したのでした。しかし説得にあたる市民活動や女性活動団体、医療や保健活動をしている組織の代表たちは、大真面目に「今、私たちが議論しているのは、白井さんのプライベートなことではなくて、尼崎市の未来についてです」。「大変な財政状況の中で、市長として舵（かじ）取りすることは、火中の栗を拾うようなもので大やけどするかもしれない。でも誰かがその役割を果たさなければならない。みんなで応援するから、白井さんにチャレンジしてもらいたい。もう白井さんしかいない」。確かに、その話し合いをしたのは、もう夏が終わろうとしている時期でした。選挙戦では、有権者から「あなたみたいな経歴で大丈夫か?」「女性に財政のことがわかるのか!」「その若さで市長が務まるのか」と厳しいご意見をいただきました。私は、心の中で「客室乗務員経験者の何が悪いのか」「財政のプロと自負していた現職が、赤字団体寸前にしたではないか」「42歳が若いのか」と反論していました。当選後は、他都市の市長から「代理の方ですか?」「（選挙だとわかっているのに）白井さんは、どうやって市長になったの?」と聞かれるなどマイノリティを実感。一方、財政再建と福祉のバランスにおいて、市民の方々から「今の私たちが良ければ、それでいいというわけにはいかない。子供たちや未来のために税金の使い方を市と一緒になって見直そう」と、車座集会等に参加して意見を述べたりして、結果、多くの厳しい改革を実行することができました。市民の決断に大いに助けられました。

そんな中、2005年4月JR福知山線脱線事故、同年6月工場周辺住民によるアスベスト被害問題など、尼崎市として対応を迫られる大きな事故や問題が次々と起きました。

JR事故については事故発生直後から現場付近の企業等が全力で救助活動にあたってくださり、行政も人命を最優先させることに撤（てっ）しました。

アスベスト問題では、民間組織がアスベスト被害者に寄り添い、様々な支援活動を行い、今も継続されています。

改めて様々なことを振り返ると、自分の至らなさや不甲斐なさに身の縮む思いですが、多くの人たちに助けられて8年間の任期を全うすることができたのだと改めて感じます。

自分一人でやらねばならないと思い過ぎずに、周りの力を信頼して、これからも新しいことにチャレンジしたいと思っています。

& MORE

テーマ「進め！働きママン」

井上（いのうえ） 純子（じゅんこ）　ご当地プリンセス「バナナ姫ルナ」を演じる北九州市職員

■ 進め！働きママン
■ おぐら なおみ 著
■ ベネッセコーポレーション
■ 2019年初版
■ 1,080円（税別）

本書のタイトルにあるように、なぜ「働きママ」がわざわざ「進め!」という表現になるのでしょうか。国民の三大義務では、「教育を受けさせる義務」「納税」「勤労」とあるのに、女性が働くことが当たり前ではないからだと思います。

私は、高校卒業後に北九州市役所に入庁し、恵まれた福利厚生により、入庁後まもなく結婚、3児を立て続けに出産しました。

就職先の環境によっては、組織に貢献できていない当時の私のような存在は退職を勧められていたかもしれません。そうすると、その後の全国初のコスプレ公務員「バナナ姫ルナ」は誕生することはなかったでしょう。また、私が「バナナ姫ルナ=3児の母」ということで世間から驚かれますが、実は「高卒ママでも、自分にできることで成果を出したい」という強い思いが根底にありました。

この本の中では、主人公の母が結婚を機に仕事を辞め、出産後の「働きママン」に挑戦し、最後には子供から目標となる女性像になるというものです。その中で特に印象に残ったことは、「非正規雇用の仕事だから気負わなくて良い」という上司からの言葉に疑問を感じることや、「自分がやりがいを感じる仕事をしたい」という部分です。「子育てと仕事どちらも大切にしたい」と思うことは、「欲張り」と表現する方もいるかもしれませんが、子育て中でも「自分らしく社会で自己実現すること」でママの幸福度が増し、それを理解する家族とともに幸せになる人生でありたいと思います。

人生100年時代

世界の中でも特に日本は長寿化が進み、2007年生まれの2人に1人が100歳を超えて生きると予想されたことから生まれた言葉。そのため、ライフステージの選択肢が多様化していくことが予想される。私の場合で言うと、20代前半から子育て期がスタートし、20歳後半から30歳代は自己実現に向けての挑戦ステージというマイノリティな女性活躍事例。現在、働き方改革やLGBT問題など、日本の社会が「普通」としてきたことが見直されています。各個人が何歳になっても、「自分らしく」人生を楽しみ、チャレンジできる社会であってほしいです。

本人の希望により、学生が描いたイラストを掲載しています

MOVE この人にきく

スクール・セクハラとジェンダー平等教育

内海崎（うちみざき） 貴子（たかこ）
川村学園女子大学教育学部
児童教育学科学科長

2018年以降、「#Me Too」運動の広がりで、セクハラ被害者が声を挙げられるようになった。また、万全とはいえないものの、企業や大学でのセクハラ防止対策も取られている。しかしながら、学校教育現場におけるセクハラ（スクール・セクハラ）については、被害者が子どもであることから声を上げにくく、表面化しないばかりか、実態も防止対策も明らかになっていない。ここでは、教育実習でのセクハラ研究の立場から、スクール・セクハラとジェンダー平等教育について述べる。

1990年代半ば、勤務先の大学で、教育実習依頼のため母校を訪ねた女子学生が、実習受け入れの条件として、学校長から性的関係を迫られるということが起きた。学生は別の実習校で教育実習を終了し、教員免許状を取得することはできたが、第一志望であった教職には就かなかった。学校長の不適切な言動が、学生の職業選択と人生を変えてしまったのである。

■ スクール・セクシュアル・ハラスメント
学校の中の性暴力
■ 内海崎貴子氏 共著
■ 八千代出版
■ 2019年初版

このことを契機に、毎年教育実習を終了した学生から、実習校での様子を聞き取った。すると、「飲み会の席で教員に体を触られた」「生徒から性経験を聞かれた」など、実習生が直接被害を受けたセクハラだけでなく、「先生たちが職員室で、女子生徒の胸の大きさを話題にしていた」「授業中、特定の女子生徒の体に何度も触っている先生がいた」など、実習生が見聞きした教員の児童生徒へのセクハラが報告され、一度も途切れることはなかった。

教育実習でのセクハラ調査は、関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会の協力を得て、2001年度から全国調査（2004年度）を含め2017年度まで、継続的に実施している。調査から、教育実習生の約1割に被害や見聞があり、主な加害者は教員で、重篤な被害もあることなどが分かっている（調査結果の詳細は各報告書参照）。

これらの研究結果から、スクール・セクハラが起こる背景は、次の3点にあると考えられる。

① 性別による差別、言い換えると、ジェンダー平等意識の低さ
② 学校教育（制度）の中にある「教える者=教員」と「教えられる者=児童生徒」との権力関係に、「大人」と「子ども」との権力関係を加えた、二重の権力関係
③ 子どもの人権尊重、特に子どもの性的権利を尊重するという意識の欠如

また、学校教育現場では、①スクール・セクハラ（になる可能性がある）言動が児童生徒への（誤った）指導方法として慣習化されており、加害者に加害意識が極めて低く、②ジェンダー・バイアスに基づく学校慣習と教員の言動がジェンダー平等教育の実現を阻害しており、③児童生徒がジェンダー・セクシュアリティについて学習する機会がなく、それらが不可視化されている。

セクハラは性差別・ジェンダー不平等から起こる。スクール・セクハラは、ジェンダー平等教育が実現できていない、学校教育現場の構造的な問題の表出であるとも考えられる。

北九州市立男女共同参画センター・ムーブ
〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11-4
Tel: 093-583-3939　ホームページ: http://www.kitakyu-move.jp
Fax: 093-583-5107　E-Mail: move@move-kitakyu.jp

Cutting-Edge 第67号
発行　北九州市立男女共同参画センター・ムーブ
発行日　2019年10月1日
指定管理者は（公財）アジア女性交流・研究フォーラム

ムーブの Facebook ページでも色々な情報を発信しています。アクセスはムーブHPから。